

■著者・訳者紹介 執筆順（＊は編者）、①所属（専門分野）、②主要論文・著書、③ひとこと

*松本伊智朗（まつもと いちろう）

- ①北海道大学大学院教育学研究院（教育福祉論）
- ②『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』（共編著）明石書店、2008年
『子どもの貧困ハンドブック』（共編著）かもがわ出版、2016年
『貧困とはなにか—概念・言説・ポリティクス』（監訳）明石書店、2004/2011年
- ③貧困を研究することは、貧困を生み出す社会を問題にすることだというごく当たり前のことを、粘り強く言い続ける必要があるのだと感じています。そんなことを思いながら、本書を編みました。

湯澤直美（ゆざわ なおみ）

- ①立教大学コミュニティ福祉学部（社会福祉学）
- ②『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』（共編著）明石書店、2008年
『親密性の福祉社会学—ケアが織りなす関係』（共著）東京大学出版会、2013年
『危機をのりこえる女たち—DV法10年、支援の新天地へ』（共著）信山社、2013年
- ③“みようとしなければ、みえないものを見る力”にこだわって、ジェンダーやマイノリティの視点から教育と研究を続けています。貧困を可視化する営為は、尊厳／人権を問い続ける社会的な協働作業であるといえるでしょう。

藤原千沙（ふじわら ちさ）

- ①法政大学大原社会問題研究所（社会政策・労働問題）
- ②『労働再審3 女性と労働』（共編著）大月書店、2011年
『現代社会と子どもの貧困—福祉・労働の視点から』（共著）大月書店、2015年
『貧困と保育—社会福祉につなぎ、希望をつむぐ』（共著）かもがわ出版、2016年
- ③底辺層の暮らしを丹念に追いつつ上層部の世界への想像力を広げたい。眩暈がするほどの格差が現実にある。

阿部 彩（あべ あや）

- ①首都大学東京都市教養学部（貧困・社会保障論）
- ②『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波新書、2008年
『子どもの貧困Ⅱ—解決策を考える』岩波新書、2014年
『新しい社会政策の課題と挑戦1 社会的排除／包摂と社会政策』（共著）法律文化社、2007年
- ③6月末に平成28年の子どもの貧困率が公表された。16.3%から13.9%へと減少した。景気の動向によるところが多いと思うが、喜ばしいことである。秋から詳細分析が始まる。どこがよくなったのか、悪くなったのか、知りたくてうずうずしている。

フラン・ベネット（Fran Bennett）

- ①オックスフォード大学社会政策学部に上級研究員
- ②「イギリスにおける子どもの貧困とCPAGの活動—日本に向けての論点」『貧困研究』Vol. 6、明石書店、2011年
「イギリスは子どもの貧困にどう取り組んでいるのか」『イギリスに学ぶ子どもの貧困

- 解決—日本の「子どもの貧困対策法」にむけて』（共著）かもがわ出版、2011年
- ③社会保障政策、ジェンダー問題、貧困と所得分配等を中心に研究。1983年から93年にかけて、イギリスの著名な市民団体であるCPAG（Child Poverty Action Group）の代表を務める。

【翻訳】屋代通子（やしろ みちこ）

- ①特定非営利活動法人CAN／児童自立支援／英米文芸翻訳
- ②『子ども保護のためのワーキング・トゥギャザー』（共訳）医学書院、2002年
『ビダハン—「言語本能」を超える文化と世界観』みすず書房、2012年
- ③虐待からの保護は貧困からの脱出を保障してはくれません。早く社会に出すぎた子ども・若者たちが、教育・訓練の場に抵抗なく入れる仕掛け／仕組みと、公的な住居保障。いまどうしても欲しいものです。

蓑輪明子（みのわ あきこ）

- ①名城大学経済学部（現代資本主義論・女性労働論）
- ②『キーワードで読む現代日本社会』（共編著）旬報社、2012年
「2000年代における女性労働とケアの現状—低年齢児童を持つ家族の労働と保育」『大原社会問題研究所雑誌』No.695・696、2016年
『男性問題から見る現代日本社会』（共編著）はるか書房、2016年
- ③子どもの貧困率が下がったと報じられているが、経済の動向によって貧困率が上下したり、社会保障の不備で劣悪な雇用が強制されたりする構図は変わらない。女性や子どもであれば、その影響はより深刻だ。何をどう変えたらいいのか。本書の論稿がそんなことを考える一助になれば嬉しい。

丸山里美（まるやま さとみ）

- ①立命館大学産業社会学部（社会学・ジェンダー論）
- ②『女性ホームレスとして生きる—貧困と排除の社会学』世界思想社、2013年
『質的社会調査の方法—他者の合理性の理解社会学』（共著）有斐閣、2016年
『下層化する女性たち—労働と家庭からの排除と貧困』（共編著）勁草書房、2015年
- ③女性の貧困について研究しています。最近では、見えにくい女性の貧困をどのように可視化させることができるのかに関心をもっています。

鳥山まどか（とりやま まどか）

- ①北海道大学大学院教育学研究院（教育福祉論）
- ②「家計に見る女性の困難—生活再生貸付利用者へのインタビュー調査から」『教育福祉研究』第18号、2012年
「借金問題のいま」『季刊家計経済研究』第102号、2014年
「調査報告—北海道の母子生活支援施設の現状」『教育福祉研究』第21号、2016年
- ③さまざまな工夫や努力をしなければ生活が成り立たない、がんばってやりくりしても支払いが追いつかない、という社会そのものの「おかしさ」を議論の俎上にのせたいという思いを持って、本書の執筆に携わりました。

吉中季子（よしなか としこ）

- ①神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部（女性の貧困・社会保障）
- ②『新しい社会政策の課題と挑戦1 社会的排除／包摂と社会政策』（共著）法律文化社、2007年
『あたりまえの暮らしを保障する国デンマーク—DVシェルター・子育て環境』（共編著）ドメス出版、2013年
『ドメスティック・バイオレンスにおける『経済的暴力』の概念—その予備的考察』『社会問題研究』（大阪府立大学）第66巻、2017年
- ③貧困はその様相も見え方も変化するので、常に人々の生活や現場から考えていかなければならないと思う。貧困問題を通じて、あらためて年金等の問題を検討したいと考えている。

大澤真平（おおさわ しんぺい）

- ①札幌学院大学人文学部（児童福祉論）
- ②『若者と貧困—いま、ここからの希望を』（共編著）明石書店、2009年
『日本の子どもの貧困の現状』『公衆衛生』80巻7号、2016年
『子どもの貧困の経験という視点』『教育福祉研究』第22号2017年10月（予定）
- ③貧困にある子どもの自己責任を問えないことは合意できても、貧困にある若者の自立について自己責任を問う声は大きい。一人ひとりの人生に想いをはせれば連続線上にある問題なのだが、それは見えにくいのだろう。

杉田真衣（すぎた まい）

- ①首都大学東京都市教養学部（教育学）
- ②『高卒女性の12年—不安定な労働、ゆるやかなつながり』大月書店、2015年
『二十一世紀の若者論—あまい不安を生きる』（共著）世界思想社、2017年
『高卒女性たちの労働と生活を追って』『女性学』Vol.24、2016年
- ③性的サービス労働の未経験者であり、研究者である私は、何をすべきでなくて、何をすべきなのか。経験者の話を聞きながら問うなかで至った認識について書きました。ご批判いただきながらさらに考えていきたいです。

藤原里佐（ふじわら りさ）

- ①北星学園大学短期大学部（障害者家族への支援）
- ②『重度障害児家族の生活—ケアする母親とジェンダー』明石書店、2006年
『子ども虐待と家族—「重なり合う不利」と社会的支援』（共編著）明石書店、2013年
『障害児家族の困難と支援の方向性—母親に偏在するケア役割めぐって』『障害者問題研究』第42巻第4号、2015年
- ③子どもをケアすることの価値づけが高まり、時としてSNSを通じて発信され、共感される。女性の生き方が多様化し、選択肢が増えているように見える中で、貧困への接近というリスクを俯瞰的にみる必要がある。

田中智子（たなか ともこ）

- ①佛教大学社会福祉学部（障害者福祉論）
- ②『子育てとケアの境界—家計構造からみた障害児ケアの困難』『障害者問題研究』第42

卷第4号、2015年

「障害者と家族の貧困—子殺し事件から考える家族ケアの臨界」『人権と部落問題』第67卷11号、2015年

「障害者家族におけるケアの長期化と家族内部の不平等」『日本の科学者』Vol.51 No.2、2016年

- ③生老病死を支えるケアは、本来、人々の紐帯となるものですが、家族責任が強調されることで、人々を追い詰め、孤立させる脅威にもなりえます。貧困とそれに伴う自己責任の広がり、ケアを変質させることを危惧しています。